

一の倉沢烏帽子奥壁
 変形チムニールート

79年6月7日(雨)

(編成) L田中隆、塚原正典

(行動内容) 車中ですでに雨が降っていたので、何かの偶然で雨がやまないかと、祈るような気持ちで土合の階段を登った。しかし、小降りなのでやむと、仮定をし、行動を起こすことにした。朝食もとらずに一の倉沢出合まで早歩きで、次々と登山者を追い抜く。僕らは取付一番乗りをして、十二時までには登はんを終了しなければならぬ。

天気は悪くなる一方なのだ。ガスで視界がきかなくなつた。天気が悪いせいか、だれも登っていないかつた。

僕らはせめてテールリッジまでと思ひ、雪溪に踏み込んだ。のんびり歩いていると、後から登山者が追い抜いていく。彼らはテールリッジを登っていった。そこ

で、僕らは取付まで行き、様子を見ることにした。

奥壁下には、だれもいなかった。休む間もなく、登はん準備にかかる。

一ピッチ目、雨はやんでいたので、岩はそれほどぬれていず、快適に行く。

二ピッチ目、塚原がトップで左にいやらしいトラバースを行い、横断バンドへ。

三ピッチ目、上部は垂直の草付壁でふさがれている。右上すると正規のテラスに出、その上の垂壁をアンダーホールド等を使い越え、ルンゼ状に入る。かなりいやらしい壁だつた。

四ピッチ目、変形チムニーがガスの切れ間から、すぐ上に見えた。僕はチムニーの奥まで入り過ぎ、越えるのにかなり苦勞した。まわりの壁は雨でツルツルの壁と化していた。チムニー登りの下手さをつくづく感じさせられるピッチだつた。ここで後鏡パーティーが次々と追いついてきた。

チムニーからすぐ右へトラバース、草付で少しいやらしかつた。そこで、中央カンテルートと合流。まわりは真暗でカメラのシャッターがおりない。雨も本格化してきたので、雨具を着て登る。

六ピッチ目、中央カンテルートには、先行パーティーがいたので、正面ルンゼにはいる。ルンゼ右の壁は浮き石が多く気分が悪い。

七ピッチ目、ゆるい岩を右上。確保している上から人が落ちてきた。彼は八才ほど、でこぼこの岩の上を落ち痛そうだつた。

八ピッチ目、凹角の下を左にトラバースし、ピナクル上に出る。

九ピッチ目、垂直の壁をA0で強引に乗り越す。

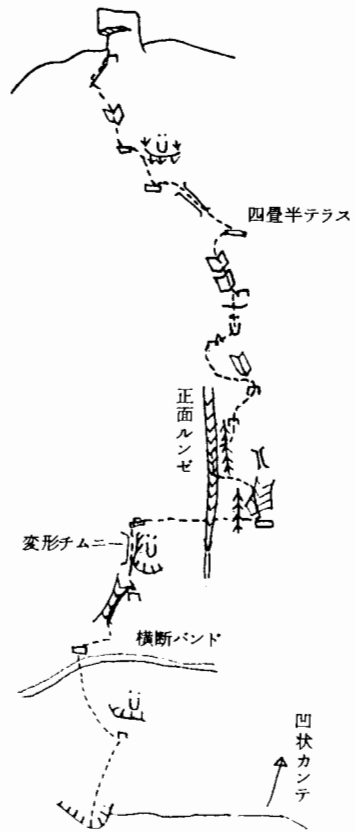
十ピッチ目、凹角を豊富なハーケンを使い、A0で快適に越え、四畳半テラスに出た。

十一ピッチ目、左上の岩溝を登る。

十二ピッチ目、塚原がトップで草付壁を直上して行く。僕は、彼は何をやっているのだろう、と思つて気楽に見ていた。後で彼が言うことには、ルートをまちがえ、最悪の壁だつたそりだ。左上するとやさしい岩登りで、テラスへ。

十三ピッチ目、小さな凹角を越え、烏帽子岩下へ。

十四ピッチ目、裏側のルンゼに降り、いやらしい壁を登り、終了。このピッチ



No. 1807

一の倉沢四ルンゼ

79年6月16日 (快晴)

で、僕は石を落し、下にいた人の顔にぶつけてしまった。僕にできることといったら、ただあやまることだけだった。これでせつかくの山行が、後味の悪いものになってしまった。しかし、全体的に理想に近い山行がやれたと思う。

下山ルートは、ルートを誤まり、天神尾根を下ってしまった。

(タイム) 土合 3・00 取付 6・30 登はん終了 11・30 一の倉岳 12・40 (13・10) 土合 15・30

(田中隆記)

(まえがき) 本来ならば、烏帽子奥壁の凹状ルートが我々の予定していたルートであった。しかし、先行パーティーが多数取付いており、時間的な面、そして何よりも落石に対する危ぐから、ルートを三ルンゼに変更した。

(編成) L竹林金一郎、中島三夫、外

藪信夫、田中隆

(行動内容) 五ルンゼの出合でアンザイレン、四ルンゼのF滝へザイルを延ばしていく。もろい足場に思いのほか苦戦を強いられたが、ルンゼの傾斜は弱く、スピードは上がった。三ルンゼの出合とおほしきところにきたが、雪溪等で現況判断を誤まり、そのまま通過してしまった。後続が登り始めようとする、その時、三ルンゼが落石を発した。規模こそさほど大きくはなかったが、トップを墜落させるには充分であった。ともかく、ルートファイディングの失敗が、我々を安全へと導いた。

四ルンゼの各滝は厚い雪溪におおわれ、その通過は思いの外、楽なものとなった。ルンゼの影が浅くなり、ゴロ口状をなしてきた。登はん終了は間近い。だが、四ルンゼのどんづまりでは巨大なブロックなだれが形成されつつあった。その時、我々は通称ノドと呼ばれる場所にいた。このノドの通過があと十数分おそければ、我々は四ルンゼに散つただろう。

この時期のルンゼ登はんは、ブロックに対し充分な注意を払う必要がある。

(外藪信夫記)